

# 保育の体験と思索

—子どもの世界の探求— (五)



津 守 真

六月十五日

砂場に出たら、男児S、M、N、Uがざりがにを砂の中でいじっている。みんな夢中で大声をあげている。ざりがには砂にまみれてうごめいているので、私が、「水をいれるとざりがには元気になるよ」と言うと、子どもたちは水を汲みにゆく。砂の中の水の中、バケツの水の中にざりがにをいれて、砂をいれるので、ざりがには砂の中に埋もれたり、見えかくれしている。見ているとざりがにが死んでしまいそうに見えて、何か口を出したい気持ちになる。子どもがいじっているものが、おとなが考えるのとは違った仕方であつて見ると、おとなは自分の立場だけから、そのものと子どもとの結びつきを忘れて、何か言いたくなる

のだろうか。私は、自分自身が子どもだったとき、いま考えると何と残酷なことをしたのだろうと思うような記憶がいくつもあつた。それはいずれも、親の目の届かないところで、兄や友だちとやったことだつた。それらは、土や草の香りとともに、鮮明に記憶されている。そういうことを思うとき、夢中になつてざりがにをいじっている子どもたちに、口うるさく言うことに自己嫌悪を感じる。おとなが見ていない場面があることが、子どもの生活にとって必要なことであることを思わせる。幼稚園でも、先生がいろいろの子どもとつき合うのに忙しくて、見ていられない場面があるのがよいのだと思う。おとなが監視的な見方しかできないときには、そこに長くついでいない方がよい。私も他の子どもたちによはれて、ざりがにのところを立ち去つた。しばらくしてどつてきたときには、子どもたちは、ざりがにを水槽にもどして

いた。

砂場の別の場所で、隣の組の女児Riが私の傍にきて、砂をつかんで私の手に渡し、山のように積ませる。私はいそがないで、少しづつ山にする。山をつくることを目標とするなら、どんどん山を作ればいいのだが、自分がそのことに気をとられたら、Riの気持ちから離れてしまうように思い、いそいではいけないような気がして、ゆっくりと手を動かす。するとRiは、じよろに水を汲んで、積んだ砂の一部に水をかけ、山はえぐれて池のようになる。

Riはどんどん水を汲んできて、水たまりの中に砂をいれる。これを取りかえすことが面白いらしい。最初から、Riは山をつくることを考えていたのではないようである。私に砂を手渡すことによって私とのつながりをたしかめ、さらに、砂を水の中に入れるという行為を反復して楽しんだ。ここでも私はいそがないでよかったと思った。

こうしながら、Riは私にはなしかける。「きょうは体操だ」という。「あしたは？」ときくと「幼稚園」という。「その次の日は？」ときくと、「センター」という。「お勉強するの」という。Riは体操教室や勉強教室に通っているらしい。この幼稚園では、ひとりであらうあらしることが多く、私との砂遊びでも、一番

原始的な遊びをする。このような会話をすると、この子の幼稚園での何もしない生活が理解しやすい。それも、この子どものペースに合わせて、ゆっくりと動いていったので、子どもが自分から語り出してくれたことである。さらに、この子どものペースに合わせて、原始的な遊びをひき出してゆくことが必要な子どもである。

子どもとの間で何をたいせつにしたいと思うか

砂場の中は次第に水びたしになり、子どもたちは、はだしになつて砂場の中を歩きまわり、手足を砂と水で濡らして遊ぶ。私もその中で一しよに手を砂の中につっこんでいた。いつも一番力が強くて暴れまわるMくんとNくんが、そこで一しよに遊んでいた。そのとき思いがけず、私とその子たちの中にひきこまされることが起こった。いつも予期しないときに、思いもよらなかつたできごとによって、考えさせられることは起こるものである。

黄色い蝶がどこから飛んできて、砂場の真中の砂山の上にとまった。Mくんがそれをつかまえようとすると、蝶は逃げて、Mくんの肩にとまった。NくとSくんは、それを見つけてとろうとすると蝶はまた逃げる。その蝶がこんどは私の背中にとまっ

た。みんながそれをとろうとして、私の方に来た。みんな、手が水と砂でびしょびしょにぬれているので、その手で蝶をつかまえたなら、蝶の羽が破れてしまうだろうと思ひ、うまく蝶が逃げてくれる機会があるといいと私は思っていた。それで、蝶が私の背中にとまったとき、私は蝶がどこにいったかさがすふりをして、子どもたちの手がとどかない方向に、何度か体の向きをかえたので、蝶は砂場の外に逃げていった。

すると、MくんとNくんは、おじさんが蝶を逃がしたと言つて、顔を真赤にして怒つて、砂を握つては私にかけてきた。水でべちゃべちゃの砂をかけるので、私の服が汚れる。私は、瞬間、もう一步ふみこんで、こちらから砂をかけ返したかったが、一步退いて逃げた。他の人の目を気にしたのである。MとNは、なおも私を追つて砂をかけてくるので、私はお角力しようと言つて、Mくんと何度も取り組み、Mくんをひき倒すと、Mくんは泣きそうになる。そうすると、Nは、「Sちゃんのせいだもん」という。私は、Sちゃんがやったわけではないでしょうという、NはMの顔をのぞきこんで、「だれのせい？ だれのせい？」とたずねる。私はだれのせいでもないでしょうと言つて、そばにいるSは、何のことか分からずにぼかんとしている。Mくんは強そうに見えるが、角力をとつてころがされて少し強く打つたりすると、

すぐに泣いてしまう。この時も、Mはいつものように泣きそうになつたのであるが、いつもMについて歩いているNが、それはだれのせいかと言つた時には、私は思わず、対等の応対をしそうになつたのである。私は子どもと本気になつて対等のつきあひをすることは、根本において、たいせつなことであると思う。しかし、おとなの正義感をそのまま子どもにぶつけると、その子には何のことか分からないで、反感ととまどいだけを残す結果になることがしばしばある。もう二十年以上も以前に、私はこの同じ組で、強い男の子に対して、私自身の正義感から、その子の肩をつかまえて激しく怒つたことがあつた。そのときに、同じH先生から、三歳児の世界はもつと淡いものだから、この日の私のやり方は三歳児に対するやり方ではなかつたと言ひ注意されたことがあつた。その後、私は同様のケースにいくつもぶつかつて、そういうときに子どもが見ている世界は、おとなの価値観の世界とは違うことを見てきた。おとなが威だけ高になつたら、子どもとの距離は開くばかりで、おとなが伝えたいと思う価値観にも、反発心を起こす結果だけが残ることになりかねない。

この日の状況を記しながら横道にそれてしまつたが、私がここでとり上げたいと思つた要点は、Mくんたちが、蝶のことで怒つて私に砂をかけてきた。それに対して、私も砂をかけ返したかつ

たが、私も一しょになって砂だらけになることをさし控える気持ちにはたらい、子どもと同じレベルになってつき合うことをしなかったことにある。この日のMくんとNくんと私との間のことをもう少し問題にしたいのであるが、そのために、ここに至るまでのことを記しておかねばならない。

私がこのクラスにくと、しばしば、元気のいい男の子たちが私にとびかかってきた。私はその相手をしてひっくりかえしたり、取組み合つてころがったりしてきた。MとNはその中でも最も力が強く、わざと後ろからねらったり、げんこつでお腹を打つてくるときなどは本当に痛い。三歳児の中では最年長で、知力も体力も共にあつて、遊び方も、早生まれの子どもと比較したら何段階も違いがある。私は、この子どもたちは、エネルギーが発散しきれないでいるのだから、私が相手をするることによって、発散させることができるだろうと考えてきた。しかし、私の心の中には、この子たちに見つからないといいなという気持ちがあつた。外から見たならば、私はこの元気のいい男の子たちと仲よく取組み合いをしているように見えたかもしれない。しかし、あまり大きく発展しないという気持ちもあつて、心をぶつけ合うところに至って至っていなかった。そして、砂場で小さい子どもたち

の作った砂山をふみつぶして歩いたり、ひそひそささやき合つて女の子のスカートをまくったりするのを見ると、快く思わず、この子たちを見る目にはとげがあつたのではないかと思う。

それらのことが、この日に砂場で蝶を逃がしたときの私とこの子どもたちとの間にあつた背景である。この子たちは、いつも受けられていてくれないおじさんに対して、砂を投げかけてきた。それは、問柄を回復しようとして向かってきたチャンスでもあつた。しかしそれを受けて立つのには、私も砂まみれにならねばならず、そこまでふみこむのにはためらいがあつた。私は悩みを感じた。

その日の午後、弁当の後、女兒Mが私になわとびをするのを見せるので、庭でそれにつきあつてみると、Sが何度も、私に山にいこうとよびにくる。私はなわとびが終るまで一寸待つていてくれと返事をしていたが、何回もよびにくるのでついていった。いってみると、大銀杏の樹のかげに、MくんとNくんがかくられていて、私がいくと見えないように、木のまわりをまわつてかくれる。MとNがSに命じて私をつれてこさせたのだろうと思われる。私は見つけれないふりをしてそこを立ち去つたが、このことは、この子たちとの問柄をなんとかしなければならぬ気持ち強くさせた。

この日、保育を終えてから、私は気持ちがあすつきりとせず、このことについていろいろと考えた。子どもがこうして砂をかけてきたときに、私が砂をかけ返して、両方が砂まみれ、泥まみれになったら、それは幼稚園の中ではなすべきことではないのだろうか。そこに至る前に、もっと穏やかな方法でとどめることができるのだろうか。いや、しかし、保育の場で、最もたいせつにしたことは、その子たちと私との間柄である。その子たちが、私の目にとげを感じていたら、そこで何ができるだろうか。その子たちが、私は他の子どもには優しくして、自分たちは疎外されていると感じたら、そして、私も、知らず知らずのうちに、その子たちは乱暴で困ったものだと思っていたら、そのことが反発心や粹を外れた行動を生み出すことになるだろう。

私は、ほかの何をさしおいても、その子たちとの関係を回復したいと思った。たとえそれが泥の投げ合いになっても、子どもとの心の通じ合いをたいせつにしたいと思った。それがどういう行動となつてあらわれるかは、そのときでなければ分からない。しかし、重要なのは、表面にあらわれた行動ではなくて、子どもの心持ちをたいせつにする根本態度であると思った。私はこういうように考えたのであるけれども、それが絶対に正しいとか、だれもがこう考えるべきであるというように思っているわけではない。

そういう絶対的立場をとつたら、むしろそれは誤りであろう。このような具体的なことさらに遭遇して、私は、子どもとの心の通じ合いをたいせつにしたいと思っただけである。

私がこう考えるに至つたのには、私自身のいくつかの過去の経験がある。

愛育の知恵おくれの子どものグループで、ある雨の日、あちこちでぶつかり合いがあつて泣き声があたえなかつた。元気で活発な子どもYが、体のやや小さいHの髪を引張り、Hは泣きわめいた。それは、Hがクレヨン箱に、クレヨンをきれいに並べていたところに、Yがきて、そのクレヨンの箱をひっくり返そうとしたので、私はHのことを思い、Yの手を押えたことから、YはHの髪を引張つたように思う。そのとき、私は、Yにとってとはめて、ではあつたが、Yを伸ばすものではなかつた。Yは、私とHから疎外されたものとして感じていたのではないかと思う。私はそのことに気付いたので、子どもの世界をひろげるものとして入りたかと思つた。その日は雨で、室内はごたごたしていたが、その日の後半は全員が活発に動きながら、調和のとれた良い一日であつた。もちろん、複数のおとなが参加しているこのグループで、私の動きはただ一つの要因であるにすぎないが、それでも、私がか

のことに気付かなかつたなら、私のまわりでもっと悶着を起こしていたのではないかと思う。

知恵おくれの子どもの間で、こういうことは何度も経験させられてきたし、その度に、自分の心が少しずつ広くなってきたように思う。

六月二十一日

前に述べたMさんとNさんのことがあってから、私はずっと幼稚園にいけなくて、心にかかりながら過ごしていた。この日には、私はMさんとNさんとの心の通じ合いを回復することにつとめたいと思って幼稚園にいった。いつもだと、MやNに出会うことを避ける気持ちが心の隅にあったが、この日は、こちらから探すような気持ちで庭に出た。

庭に出ると、Gが砂場でケーキを作って私をよぶ。砂場に入ってきたとすると、急にMさんが後から私の肩を叩いた。私が入ると、さっと遠ざかって、砂場の外から私に砂を投げた。私はすぐにMさんの方に向き直った。Mさんは、また砂を二、三度投げた。私はMさんに、一しよに遊ぼうと呼びかけると、Mさんは近づいてきた。「Mさん、一しよに穴掘ろう」と言

って私は穴を掘りながら、今日は他の子をおいても、Mさんの手をしようと思った。私がプリン型の型をぬくと、砂場のへりでそれがくずれ、Mさんが笑った。私が「Mさん、やってみせてくれ」というと、Mさんがやるがやはりくずれる。「黒い砂でなくちゃだめだ」というので、黒いしめった砂をMさんの型の中にいれてやると、うまくできる。「Mさんはよく知ってるな、すごいな」というと、Mは、「もう一つとれ」という。Mさんがやるとまたうまく型がぬける。Mは得意顔をして見る。「ほう、うまくできるな」というと、また得意になって作る。こうして相手をしているときのMさんの顔は、私に対するいつもの精悍な顔ではない。これだけで私は、今日きた甲斐があると思った。Mさんがふだん暴れていたのは、エネルギーが余っているのだと私は解していた。そして、角力をとったり、ひっくり返したりしていた。しかし、それはMさんにとっては、私からの挑戦とうけとられていた面もあったのではないかと思う。もっと幼稚なMさんの姿を見なければいけなかったのだと、つくづく思った。

この日は、じきにMさんは砂場から去り、他の子どもたちと遊びはじめた。Mさんと砂だらけになることを覚悟していったのだが、いつもよりもずっと穏やかな活動で終わった。そしてわずかの時間だったが、Mさんも満足したに違いないと思う。この日、そ

の次にMくんと会ったのは、帰りがけだったが、椅子に座ったとき、私の顔をみる表情がとてもいい。

それから一週間後、暑い日で、川の流れるに水が流れており、子どもたちははだしになって遊んでいる。砂場で、MくんとNくんとSとが、足を砂で埋めて、そこに水を流し、水が砂を洗い流すとキヤーキヤーと喜んでゐる。私も足を埋めるのを手伝う。Mくんが「おじちゃんの足も埋めよう、くつぬいで」という。私が「よし、ぬいでいくぞ」と言つて、靴をぬぎはじめると、MくんとNくんは、砂を掘る手を休めて、「ほんとにぬぐかな——」とささやきながらこちらをうかがっているのが、私に射すようにわかる。私のはだしになって砂場にはいると、またもとの遊びにもどつて、私の足を埋めて水を流す。ここで、もしも私が靴をぬがなかつたら、Mくんたちの反応は違ったものになっていただろう。このとき、私を見る彼らの目が、すつと素直になつてゆくのが分かるような気がした。それから、山を作り、トンネルをあけて、Mくんの指先が私の指先にさわると、Mくんは声をあげてよろこぶ。

このことにつづく日々、MくんやNくんと砂の投げ合いをしてつき合つたことは一度もない。いま考えると大げさなほどに、ど

んなに汚れても、この子たちとの心のふれあいをたいせつにしたいと心に言いきかせて、この子たちの中に積極的に入つていったのであるが、外から見たならば、おそらく何ということはない平凡にみえるつきあいがつづいたのだと思う。私の側からみるならば、MくんとNくんはおだやかな眼で私を見るようになり、親しみをもつて私にもたれかかってくるようになった。

夏休みが終つて、しばらくこの組の子どもたちには会わないで、久しぶりにいった日、私がつぶくりしたことに、「おかえりなさい」と言つて、数人の子どもが、庭の出入口から室内の私をのぞきこんだ。その中に、MくんとNくんの顔があつた。

その翌日、Nくんが私の傍にきて、かまきりをさがしてくれという。私はバラ棚の下の草むらで、Nくんと長い時間、かまきりさがしをする。かまきりが見つかるはずはないのだけれど、草むらの中をさがしながら、Nはいろいろとしゃべる。三陸海岸におばあちゃんと一しょにいったこと、そこでかまきりをみつけたことなど。途中で他の子どもがくると、「だめだよ、いまおじさんと話しているんだから」と言う。私は他の子どもとも話したり相手をしたりしながら、かまきりをさがしていたが、Nくんは、一日中私の傍について歩いてゐた。他の子どもには荒い語気で何か

しゃべり、力強く他の子を押しのけたりするが、私と話すときには穏やかな調子である。

この後も、思いがけないときに肩をたたかれて、ふりむくと親しげにNくんが顔をすりよせてくることしばしばある。一時は、私に向く眼が險悪で反発的であったのに、私がほんの少し見方を変えただけで、こんなにもたやすく変化するのを見て、幼い子どもは、なんと柔軟で、よいものだろうと思う。

Mくん、Nくんと私との間のことを再び考えてみるに、最初、砂場で蝶を逃がしたことから、彼らは私に対して、日頃の反発をぶつけてきた。そのとき、私は十分に受けて立つことができなかった。こういうときに、どうしたらよいかを考えたとき、私はこの子どもたちと心を開いてつき合いたいと思った。こうすべきであるというよりも、こうしたいと思っていることが、自分自身にも明瞭になってきた。おとなとしての理想や目標が高くなるほど、こうすべきであるという意識が先行して、自分が本当にどうしたいと思っているのが分からなくなってしまうのではないだろうか。子どもたちの中に入ったとき、そこで何をたいせつにしたいと思うかという判断は、場合により、子どもにより、また保育者によって少しずつ違ってくると思う。それは、保育する人と

子どもとの間できまるものであって、現象としてあらわれたものからだけで批判することはできないものがあるのではないだろうか。子どものことを考えるにも、その行動よりも心持ちをたいせつにしたいし、保育者についても、その言動よりも、その心のあるところを（意図や目標ではない）見てもらいたいし、また、重視したいと思う。

（つづく）

